

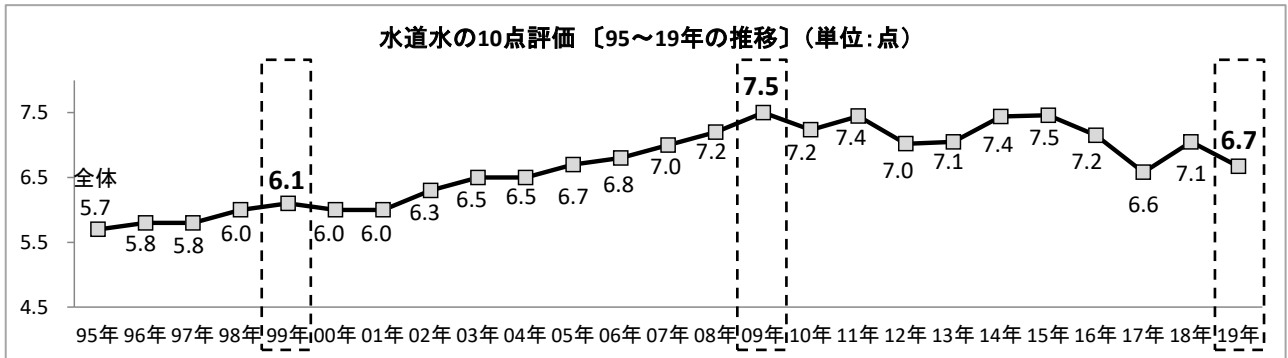
## 【特別企画】水意識の変遷～平成から令和～

ミツカン水の文化センターでは、平成から始まり、25年間続いてきた本調査の令和初回特別企画として、1995年(平成7年)の本調査開始以降、一般生活者における水への意識がどのように変化しているのかを探るべく、「水道水の評価」や「水に関する認知・経験」をはじめとした幾つかの設問について、今から10年前(平成21年/2009年)および20年前(平成11年/1999年)との比較を行い、平成から令和にかけての水意識の変遷を辿りました。

### Q.水道水を10点満点で評価すると？ (0～10の整数を自由回答)

#### ◇2009年をピークに横ばい～やや減少傾向に

水道水10点満点評価の平均点を1999年、2009年、2019年の定点で比較すると、1999年は6.1点、2009年は7.5点、2019年は6.7点と推移。調査を開始した1995年以降の経年変化をみると、2009年まではほぼ右肩上がり、同年をピークに2010年以降はほぼ横ばい、2015年以降はやや減少傾向となっています。



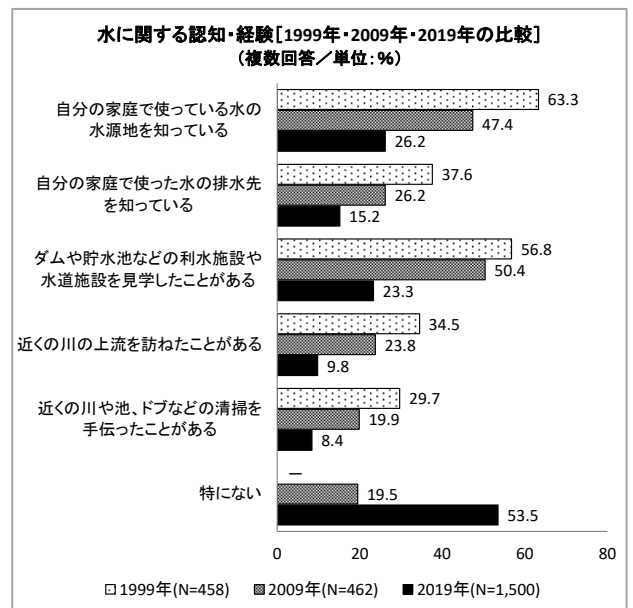
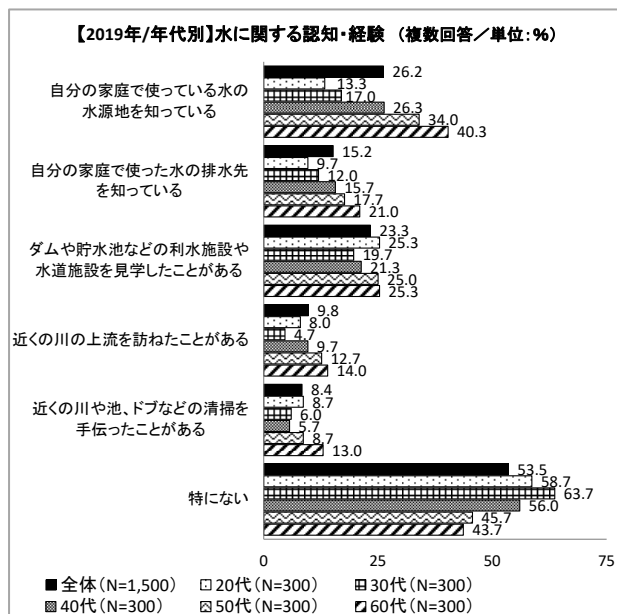
※2009年以前はFAX調査

### Q.水に関して知っていること、経験のあることは？ (5択+特にない)

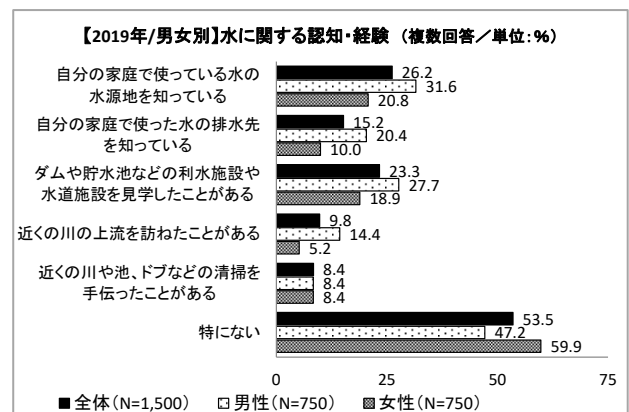
#### ◇各項目の認知・経験率が20年間で大幅に減少。

今年は「特にない」が5割超。

水にかかわる事例を5つあげ、その認知・経験を問う調査を今回改めて行い、1999年および2009年と比較したところ、①「自分の家庭で使っている水の水源地を知っている」や②「ダムや貯水池などの利水施設や、水道施設を見学したことがある」など各年の上位項目は共通ですが、①は'99年・63.3%→'09年・47.4%→'19年・26.2%、②は56.8%→50.4%→23.3%と、いずれも割合が減少。特に'09年から'19年の10年における低下が顕著であるとともに、今回の調査では「特にない」が半数以上を占めました。この結果は、私たちが生活を営む上で欠かせない水への関心が薄れてしまっていることの表れかもしれません。



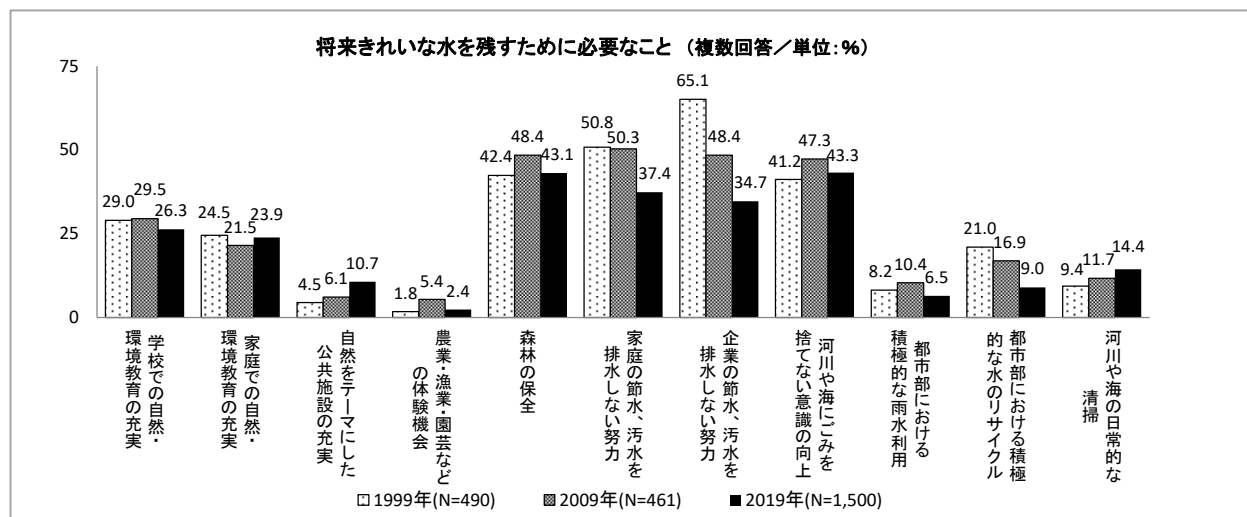
※2009年以前はFAX調査



## Q.きれいな飲める水を残すために必要なことは？（11択＋その他）

### ◇環境への意識が“企業任せ”から“自分事”へ？

各年のトップ項目は、1999年「企業の節水、汚水を排水しない努力」、2009年「家庭の節水、汚水を排水しない努力」、2019年「河川や海にゴミを捨てない意識の向上」と変化。中でも、「企業の節水、汚水を排水しない努力」と「家庭の節水、汚水を排水しない努力」は、'99年は65.1%：50.8%と「企業の努力」が「家庭の努力」を大きく上回っていましたが、'09年には48.4%：50.3%、'19年も34.7%：37.4%と逆転しました。また、各項目とも全体的に数値が減少傾向にある中、「河川や海の日常的な清掃」などは増加傾向にあり、環境に対する意識が“企業（他人）任せ”から“自分事”へと移り変わっていることが垣間見える結果となりました。



※2009年以前はFAX調査

## Q.日頃不安や心配に感じていることは？（'19年:13択+特にない/'09年:12択+特にない/'99年:12択）

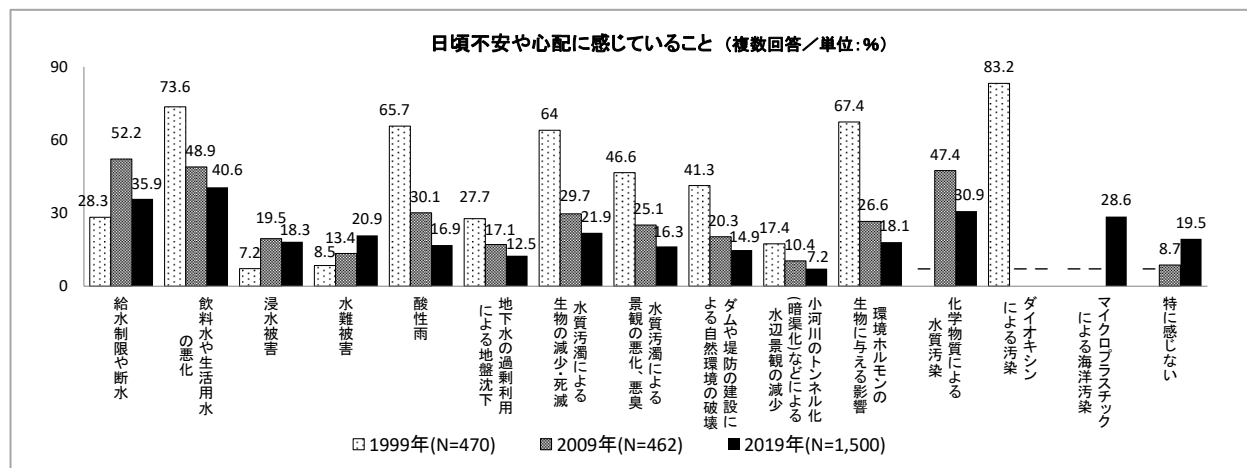
### ◇全体的に数値が減少しており、不安そのものが減っているとの見方も。

令和は、より身近な災害を不安視する傾向か。

日頃不安や心配に感じている事柄については、項目ごとで増減はあるものの、全体的には数値が減少傾向にあり、「不安そのものが減ってきている」との見方もできます。

また、1999年は「ダイオキシンによる汚染」「環境ホルモンの生物に与える影響」「酸性雨」など、当時深刻な環境問題となっていた事柄に多くの回答がありましたが、それらの項目は2009年、2019年で大きく減少（「ダイオキシンによる汚染」は'09年・'19年末調査）。その一方で、「給水制限や断水」「浸水被害」「水難被害」など比較的身近に起こり得る災害が、'09年、'19年の両年とも、'99年より増加しています。これは、メディアによるニュース報道に加え、SNS等の急速な普及により、これまではあまり目にすることがなかったローカル情報への接触機会が増えたことなども影響しているのかもしれませんが。

なお、今回新たに追加した「マイクロプラスチックによる海洋汚染」には約3割の回答があり、'19年の中では4位となりましたが、'99年のダイオキシンや環境ホルモンに比べると決して高い数値とは言えず、当センターとしては今後の動向に注目したいところです。



※2009年以前はFAX調査

## 【水とのふれあい】

まだ20世紀の末、平成だった20年前と令和になった今年の調査で、一番びっくりするのは水と我々との距離がとてども遠くなっているのが窺われる点である(3頁・水に関して知っていること、経験あること)。今も昔も義務教育、小学校の4年生の社会では「水はどこから」という単元があり、地元の水道局を訪問したり、出前授業を受けたりして、自分たちが普段使っている水道の水がどこからやってくるのか学ぶ機会が絶対にあるはずである。

それなのに、家庭で使っている水の水源を知っている人は26.2%。20年前の63.3%の半減以下である。排水先も半減以下でしかもっと無関心で15.2%。本当は小学校の校外授業や遠足で行ったはずなのに、水道施設などを見学したことがあると答えた人も半減以下で23.3%。すっかり忘れてしまっているのだろうか。

細かく見ると、シニア層は若年層の2～3倍これらの問いに「はい」と答えていて、男性は女性の1.5～2.5倍である。男性シニア層の記憶力が特に良い、というわけではないだろうから、これは、やはり若年層、特に女性の水への関心が極めて低いのだと受け止めざるを得ない。

しかし、それは悪いことではないのかもしれない。日ごろ不安や心配に感じている項目(4頁)で飲料水や生活用水の悪化を挙げた人は20年前の70%越えから40%程度までに減っている。気にしなくてもなんとかなると思うから、水道施設を見学したことも忘れてしまうのだとも考えられる。

近くの川の上流を訪ねたことのある人が34.5%から9.8%に激減しているのはインドア派が若者を中心として増えているのが現れているのだろう、おもしろいのはドブなどの清掃である。手伝ったことがあると答えた人の割合は他と同様に29.7%から8.4%と1/3にまで減っているが、将来にわたってきれいで安全な水を残すために必要なこと(4頁)として、河川や海の日常的な清掃をあげた人の割合は20年前の9.4%から14.4%に逆に増えている。

将来にわたってきれいで安全な水を残すために必要なことでは、20年前には企業の努力が必要だと答えた人65.1%の方が家庭の努力を挙げた人50.8%よりも多かったが、令和になってそれぞれ34.7%、37.4%と、家庭の努力の方が大事だと思う人が増えた点も興味深い。主に企業に汚染の責任があった公害の時代をまだ引きずっていた20年前と、自分達が汚している地球環境の改善には自分たちが努力すべきだという地球環境問題の考え方が浸透した今の大きな違いだろう。

## 水と災害

### Q.不安に感じている災害は？ (24択+その他+特に不安を感じたことはない)

◇水による「災い」が上位を占め、いずれも数値上昇。

中でも、大阪圏の上昇率が顕著。

不安に感じている災害は、1位「台風」(昨年比6.7ポイント増)、2位「地震」(8.2ポイント増)、3位「ゲリラ豪雨」(3.6ポイント増)、4位「断水」(5.5ポイント増)、5位「水不足(渇水)」(6.1ポイント増)と、上位項目の多くを水による「災い」が占め、いずれも数値が増加しました。

居住地別でも、上記1位～5位の項目においては中京圏の「ゲリラ豪雨」(2.2ポイント減)を除き、すべての項目で上昇。中でも、昨年に台風21号や大阪北部地震などの災害に見舞われた大阪圏は、「台風」が14.0ポイント増、「地震」が10.2ポイント増など顕著な上昇率を示しました。また、東京圏では「水不足(渇水)」が11.0ポイントと二桁の増加となり、今年5月下旬に宇連ダム(愛知県新城市)が貯水量ゼロを記録した中京圏でも「水不足(渇水)」がやや上昇しました(5.6ポイント増)。

